



『神の栄冠を得るため』(要旨)

聖書箇所：Ⅱテモテ4章6節～8節

スポーツの秋ですね。徒競走の走者はゴールを目指して一心に走ります。さて使徒パウロは、人生の最期まで力を緩めることなく目標に向かって走り切ったと言います。そう言い切れる人生は、なんと幸いなことでしょうか。

【1】最期に向かって

「日本人にとって価値のあるものとはいったい何でしょう。私はそれを『強さ』と『生産性』ではないかと思えます。…ところが、老いも死も、この強さと生産性とは全く反対の極に位置しているわけです。ですから私たち日本人はできるだけ老いとか死について考えたくないのです…」(柏木哲夫著『安らかな死を支える』)

獄中にいたパウロの最晩年は華々しいものではありませんでした。「強さ」と「生産性」が期待できなくなったパウロの元を去った人々がいました。しかしパウロはそうした人々に恨み辛みを述べ、自分を再評価してもらうため筆をとったものではありませんでした。彼は自分の最期を見つめ、「私はすでに注ぎのさきげ物となっています。私が世を去る時が来ました」(Ⅱテテ4:6)と記したのです。彼は差し迫った自らの死を「注ぎのさきげ物」(*祭壇に注ぐぶどう酒等)と言い換えました。それは自分の楽しみのための人生ではなく、福音のために心血を注いだ人生を物語ります。彼にとって死は絶望ではありませんでした。ようやく世を去る日が来た、ということなのでしょう。「(世を)去る」の原意は、固く縛られていた状態から「解かれる」です。パウロにとって死はこの世の縄目から解放され、天の御国に出発することを意味しました。そうしたパウロの心は穏やかでした。神様の御前で、自分のレースを精一杯走り抜いたという達成感が伝わってきます。

【2】目指すべきゴールに向かって

死を目前にしたパウロは自分の人生を振り返り、戦い抜き、走り切り、そして守り通したと総括します(*4章7節の3つの動詞は完了形)。

マラソンのような長いレースを最期まで戦い走り切ったのです。あとは勝者に与えられる「義の栄冠」が、自分のために用意されていると。

ところで競走で勝利するために必要な条件はなんでしょう。走力でしょうか？ パウロは別

の手紙で次のように述べました。「…私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません」(Ⅰコリ9:26)

パウロはただ漫然と人生のレースを走ったのではなく目標に向かって走ったのです。さらに神様が彼に用意された「走るべき道のり」を走ったのです。パウロは周りの人と自分を比較して自分に「義の栄冠」が授けられると言ったものではありません。「…キリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら」(Ⅱテテ4:1)、自分に用意されたレースを走り切った者に与えられる「栄冠」だからです。ですから「…私だけでなく、主の現れを慕い求めている人にはだれにでも授けてくださるのです」(4:8)と、神様の御前にそれぞれが自分に与えられたレースを走り切るよう励ますのでした。パウロは最後の審判の日に神様が永遠のいのちという「栄冠」を授けてくださることを楽しみにしたのです。「その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます」(4:8)と。

【3】幸いな生涯

こうしたパウロの最期のことばは希望に溢れています。この希望はどこから来るのでしょうか。強い信念でしょうか？あるいは獄中という辛い現実から逃避するためでしょうか？

彼は強がっているのでも信じ込もうとしているのでもありません。彼には自分のレースを走る過程で、誰も助けてくれない過去がありました。「…しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました」(4:16-17)と、どんな時にも「主」がともにいて下さったという経験をしたのです。こうした経験から、将来についても「主は私を、どんな悪しきわざからも救出し、無事、天にある御国に入れてくださいます」(18)と、神様への信頼を表明できたのです。

▷あなたは何を目標に日々を過ごしていますか？イエス様とともに自分の「走るべき道のり」を走った！と言い切れる生涯でありますように。